Tsukuba Psychological Research
1994, **16**, 155-161

社会的不適応児への介入に関するINSモデル

筑波大学大学院(博)心理学研究科　渡部玲二郎

筑波大学心理学系　杉原　一昭

INS model of intervention for socially maladjusted children

Reijiro Watanabe and Kazuaki Sugihara *(Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan)*

In this article, firstly, 4 theoretical prerequisites of an adequate model for intervention- one that adequately links SPS skills and social adjustment- are described. These are: specification of the nature of social competence; specification of a particular behavioral domain that can predict long-term social adaption; specification of the social information-processing steps that mediate action within this domain; and specification of the nature of the development of those information-processing steps and differentiation of developmental change in those steps from other stylistic or individual-difference dimensions of variability.
Secondly, We report INS model that can satisfy these four theoretical prerequisites, as prerequisites and INS model is presented by Selman et al..
Key words: social competence, social information-processing, interpersonal negotiation strategy.

はじめに

子どもの社会化が進行する主な場所としては，家庭や学校などが挙げられよう．中でも家庭は子どもにとって最初の社会化の場所であり，その社会のメンバーになるための基礎的社会化の場として極めて重要なものである．しかし，一つの家庭あたりの子どもの数の減少や，最近の親が育児に自信を持てなくなり，相談所などへ子どもの育児の仕方を相談するケースが増加しているなどという現実を考えた場合，学校教育の中で子どもの社会化を進めることは，今日ますます重要になっていると考えられる．

また，昨今，学校教育の中で，登校拒否，いじめ，非行，思春期や青年期の様々な神経症的障害といった問題が少なからず発生している．このような問題は，子どもが勉強についていけないということから発生する場合もあるが，そのほとんどは，人間関係に関する障害がその問題を発生させていると言っても過言ではない．誰もが他者との関わりを持とうとする本性を持って生まれていながら，円滑な人間関係を持てないがために学校生活に適応できず，それによって様々な障害が引き起こされるのである．現に，1991年4月27日の毎日新聞によれば，小学生の登校拒否のトップは，友人関係がうまくいかないということが原因の「神経症的登校拒否」であるという．そのような子どもたちが，円滑な対人関係を営み，人間社会に適応して生きていけるようになるために，教師はどのような指導をすればよいかということを導き出していくことは，今後の学校教育において非常に大きな意味を持ってくるものと思われる．

目　的

そこで，本論文では，教師が社会的不適応児を指導する際に有効なガイドラインとなると考えられるINSモデル(Interpersonal Negotiation Strategy Model)(Yeates & Selman, 1989)を紹介することを目

的とする.

本　論

1．SPSスキル研究に関するこれまでの流れ

これまで，社会認知的な領域の指導を通じて社会性の発達を促進するために，いくつかのカリキュラムとトレーニングプログラムがデザインされてきた．その中でも特に，「手段－目的について考える能力」，「ある方法が効果的でない場合に，他の方法を考える能力」，「結果を考える能力(結果の予測)」，「結果を評価する能力」のようなさまざまな社会的問題解決(Social Problem-Solving)(SPS)スキルに関心がはらわれてきた(e.g., Gesten, Apodaca, Rains, Weissberg & Cowen, 1979；Spivack, Platt & Shure 1976；Weissberg, 1985).

しかし，こうした研究の結果確立された，SPSスキルに基づいた社会的不適応児への介入の結果は，必ずしも一定したものではなかった．トレーニングの結果，SPSスキルのある側面については変化が見られたものの，より広い側面の対人的適応や個人的適応に関しては，余り変化が見られなかった．すなわち，トレーニングの結果もたらされたSPSスキルの変化と社会的適応の変化は必ずしも関連してはいなかったのである(Urbain & Kendall, 1980；Weissberg, 1985).

その原因についての考察が進むにつれて(e.g., Urbain& Kendall, 1980)，社会的コンピテンスと社会認知的成分に関するこれまでのモデルが批判されるようになった(e.g., Dodge, 1985；Shantz, 1983；Selman, 1989)．それらの批判は，おおよそ以下のようなものである.

①社会的コンピテンスの性質を定義していない.
②SPSスキルを構成する社会認知的な成分やプロセスを特定化していない.
③②に関して，それらの発達の性質を考慮していない.
④特定の文脈における社会的コンピテンスと社会的認知の関係を構築していない.

2．Selmanらによる適切なSPS介入モデルのための基準

Selmanら(Yeates & Selman, 1989)は，これらの批判を考慮し，社会的コンピテンスを定義するとともに，それに従い，適切なSPS介入モデルのための基準を設定した．以下に，それらを示す.

(1) 社会的コンピテンスの定義

過去これまで，SPSスキルトレーニングや社会的行動，社会認知的能力に関して様々な研究がなされ，その鍵概念として社会的コンピテンスに関しても様々な定義が成されてきたが，それは一貫したものではなかった．つまり，社会的コンピテンスは，「子どもや大人の身体的疾病，または精神病理の予防に関連する重要な社会的行動の側面」(Putallaz & Gottman, 1983)，「対人コミュニケーション上の基本的能力・行動特性」(Riggio, 1986)，あるいは「適切な社会的スキルを用いる能力を持っていること」(Sarason, 1981)などのように様々な角度から定義されてきた．濱口・新井(1991)はこれらの社会的コンピテンスの定義に関して学術的，教育臨床的観点から批判的考察を加え，社会的コンピテンス概念化の新しい方向性を示唆している．彼らは，社会的コンピテンスの定義をする際に必要不可欠なものとして，「社会的行動の生起を説明し，予測し得るものでること」を挙げている．すなわち，社会的コンピテンスの内潜的過程アプローチを提唱している．彼らは，その理由として，次のように述べている.

「社会的コンピテンスとして同定されるものが，実際のコンピテントな社会的行動の遂行や遂行されたコンピテントな社会的行動の総計によって間接的に推定されるものであってはならない．もしそのようなものとして社会的コンピテンスを定義するならば，例えば，『A氏が社会的場面でコンピテントに振る舞えるのは，A氏は社会的コンピテントが高いからである．ところで，A氏の社会的コンピテントが高いことは，社会的場面の行動から推察される.』というような循環論法に陥り，社会的行動を説明する機能を喪失するであろう．従って，『社会的コンピテンス』という概念で指し示されるものは，外に表出された行動から推測される何かではなく，そのような行動の生起を可能にし，かつ測定可能な内潜的なものにすべきであろう.」

では，Selmanらは，社会的コンピテンスをどのように定義しているのであろうか．それを以下に示す.

「社会的コンピテンスとは，特定の文脈における行動を仲介する感情の統制を含めた社会認知的スキルや知識の発達であり，それは自己や他者によって適切さの程度が判断され，それゆえ，ポジティブな心理社会的適応の可能性を増加させる.」(Yeates & Selman, 1989)

社会的コンピテンスの定義に関して，彼らが最も強調しているのは「社会的認知の役割」であり，これは上述の内潜的アプローチの条件を満たしている．こうした内潜的アプローチ，すなわち「社会的行動の基底に社会的認知変数を想定する」という考え方は，Selmanらが初めてというわけではなく，

70年代以降のSpivackやShureを始祖とするSPSスキルの研究に関して機能主義的な立場をとる研究者たちに共通にみられる考え方ではあるが，上述のように学術的な観点からも，また「認知的変数を操作することによって不適切な行動を修正する」という教育臨床的な観点からも，社会的コンピテンスの概念にこうした要素が含まれることは非常に重要であろう．

（2）SPS介入モデルのための基準

次に，Selmanらが定めたSPS介入モデルのための基準を示す．

①その領域での成功が長期間の社会的適応を予測するような社会的領域を特定化する．

②その領域での行動を仲介する社会的情報処理ステップを定める．その際，それらの情報処理ステップは，行動と文脈をマッチさせるようなものでなくてはならない．

③それらの情報処理ステップの発達の性質を記述的に，作用的に定義し，同時に，それらのステップ内の発達的変化とスタイル的な変化(つまり，個人差)を区別しなければならない．

以下に，これらの基準に関してもう少し詳しい説明を試みる．まず，基準の①に関しては，「社会的にコンピテントな行動がとれるかどうかは場面によって異なるため，長期間の社会的適応を導くような特定の行動領域を定めなければならない」ということである．例えば，社会的にコンピテントな行動が場面によって異なる例としては，「ある子どもは仲間のグループへの参加は容易であっても，仲間間で次に何で遊ぶかという遊びの選択に関して不一致が生じた場合，コンピテントな行動がとれない」などが挙げられる．このように，場面によってコンピテントな行動がとれるかどうかが異なるため，子どもたちが経験する数多くの社会的場面の中から，長期間の社会的適応を導くような社会的場面を見つけ出し，その場面を問題とすることによって，効率的な介入が可能になるということである．

これまで，社会的場面を分類しようとする試みは，欧米や日本でもなされており(e.g., Dodge, McCaskey & Feldman, 1985；広岡，1985)，その代表的な研究の一つにDodge et al.(1985)の社会的場面のタキソノミーに関する研究がある．彼らは，社会的に問題がある子どもを対象とする教師評定用の尺度(Taxonomy of Problematic Social Situation: TOPS)を構成する中で，社会的場面を6つに分類している．そして，これら6つの場面(仲間集団への参加，仲間の侵害に対する応答，失敗に対する応答，成功に対する応答，社会的期待，教師期待)全てにおいて，適応児よりも拒否児の方が不適切な行動をとることが多いことを明らかにし，同時に，これら6つの場面の中でも特に，仲間の侵害に対する応答場面において適応児よりも拒否児の方が不適切な行動をとることが多いことを指摘し，社会的不適応児にとって，これらの場面における行動の改善が重要な課題になると示唆している．

Dodgeらは，このような領域での行動を「社会的課題」とみなし，一連の社会的情報処理ステップによってこれらの課題が解決されると考えている．これに対して，Selmanらは，仲間の侵害に対する応答場面での対応の成功によって短期的な社会的適応はもたらされるだろうが，長期的な社会的適応をもたらすような領域としては，むしろ，より社会文化的にコンセンサスをもって認められるような，子どもにとってより日常的で，一般的な行動領域が良いと考え，「対人葛藤場面における対人交渉」の領域こそが社会的コンピテンスと関連し，社会的適応にとって重要であると考えている(Yeates & Selman, 1989)．

彼らによると，対人交渉方略とは，「自己と他者の欲求が対立するとき，他者との相互作用の中で，自己の欲求の達成を試みる手段であり，対人交渉方略は，個人的な目標を達成しようとする際に，他者との相互作用の中で発生する葛藤の感情や，あるいは個人内，個人間の不均衡の解決に役立つ」と定義されている(Yeates & Selman, 1989)．

先行研究の結果，対人交渉の成功は，社会的地位を始めとする全体的な社会的適応と関連していることが示されている(Beardslee, Schultz & Selman, 1987；Yeates, Schultz & Selman, 1991)．

次に，基準の②に関しては，特定の領域の中でさえ，ある行動が成功するかどうかは社会的文脈に依存しており，行動と社会的文脈をマッチさせるのは，社会的情報処理であるということである．例えば，対人交渉の際に，いくつかの方略が頭に浮かんだとして，仮に，相手が自分より年長者であったり，社会的に地位が高い人物の場合と，逆に，自分より年少者であったり，社会的な地位が低い人物の場合を想定してみると，実際に相手に対して用いる方略は，後者の場合により主張的なものになると考えられる．行動が成功したのかどうか，目標が達成されたのかどうかの決め手は，行動と特定の領域内の社会的文脈がマッチしたものかどうかということであり(Dodge et al., 1986)，その際，重要な働きをするのが社会的情報処理ステップだと考えられている．

社会的コンピテンスの箇所で述べたように，「社会的行動の基底に社会的認知変数を想定する」とい

う考え方は，SPSスキルの研究に関して機能主義的な立場をとる研究者たちに共通にみられる考え方であった．しかし，以前の研究者たちは社会的行動を説明するための認知変数を状況を越えた一般的なものとして設定する傾向があったため，特定場面での行動の予測力が低く，結果の再現性が悪いなどの問題が指摘されるようになった(Dodge, 1986)．その代わりに，状況ごとに特殊化された社会的認知変数のセットによって社会的行動を説明しようとする試みがなされるようになり，社会的情報処理ステップという考え方が生まれた．こうした観点から，Selmanらも，対人交渉方略を生むための社会的情報処理ステップを設定している．

最後に，基準の③に関しては，SPSスキルの研究に関して機能主義的な立場をとる研究者にこれまで欠けていた構造主義的観点，すなわち，発達の観点を取り入れたということである．例えば，前述のように，Dodgeの社会的情報処理モデルは，社会的適応と関連する社会的行動領域を定め，そうした行動を生み出す社会的情報処理ステップを想定したという点で，それ以前の機能主義的立場をとる研究者たちよりも優れていた．しかし，彼のモデルは発達的側面があまり考慮されていないという点で批判される(Gottman, 1986；Yeates & Selman, 1989)．すなわち，幼児期以降から大人期にかけて情報処理過程がどのように発達し，それが社会的行動とどのような関係にあるのかという点が見過ごされてきたのである．

Selman(Yeates & Selman, 1989)らは，社会的視点取得能力(social perspective taking)の観点から社会的情報処理ステップの発達の性質を明らかにし，これまでのモデルでは曖昧になっていたこれらのステップの変化を発達的な変化と(個人的な)スタイルの変化に分類した．彼らによると，例えば，他の仲間との間に発生したジレンマを解決する方法は，子どもが成長するにしたがって，両者の欲求を統合した，よりバランスのとれた互恵的な方法になる．しかし，同時にその内容は，自己の欲求を比較的強調するタイプと他者の欲求を受け入れるタイプに別れる．これらの現象を発達差と個人差の観点から分類すると，前者は発達的変化の次元を表したものであり，一方，後者はSPSスキルの個人的なスタイルを表したものだと考えられる．

3．INSモデルの紹介

Selmanらは，こうした基準を考慮し，これまでなされてきた機能主義的(情報処理的)なアプローチと構造主義的(認知発達的)なアプローチを統合し，社会認知的なコンピテンスと社会行動的なコンピテンスを結び付けた社会認知的なモデルを作成した(Selman, Beardslee, Schultz, Krupa & Podorefsky, 1986)．

彼らのモデルは，対人葛藤場面における対人交渉方略(Interpersonal Negotiation Strategy: INS)に焦点を当て，INSは社会的な視点取得の発達に基づくとし，視点取得の発達に対応したINSの発達段階を設定している．また，INSの発達の次元と個人的な対人志向スタイルの次元を区別し，個人的な対人志向のスタイルとして，他者変化志向(他者を自己に従わせる)，自己変化志向(自己を他者に従わせる)，協調的志向(両者の欲求を統合する)の3つを設定している(Selman & Demorest, 1984；Yeates & Selman, 1989)(Table 1)．レベル0のINSは，衝動的で身体的(物理的)な行動を含み，欲求達成のために短絡的に力を用いたり(他者変化志向)，自己を守るために何も考えず服従したり，引きこもったりする(自己変化志向)方略である．レベル1のINSは，他者の欲求までは考慮されていないものの，行動と感情は分化しているため，むやみに身体的(物理的)行動は採らず，自己を満足させるために一方的な命令をしたり(他者変化志向)，あるいは他者の統制にしぶしぶ従う(自己変化志向)方略である．レベル2のINSは，自己と他者の欲求を同時に考慮し，取引や交換などを通じて，互恵的な形で両者の欲求を満足させようとする方略であり，その際，説得などの自己の欲求を優先させる方略(他者変化志向)と譲歩などの他者の欲求を優先させる方略(自己変化志向)がある．レベル3のINSは，発達的に最も高いレベルの方略であり，自己と他者の人間関係を考慮したり，第三者的な立場から自己と他者の欲求を調整し，協調・統合させる方略(協調的志向)である．そのため，他者変化志向や自己変化志向といった対人志向スタイルは存在しない．

さらにSelmanらは，INSを生むための社会的情報処理ステップとして，(a)問題の定義(社会的問題の性質を適切に定義する能力)，(b)方略の産出(問題を解決するにはどのような方略があるのかを考え

Table 1　対人交渉方略(INS)の分類と対人志向スタイル(Selman & Demorest, 1984；Yeates & Selman, 1989)

INSの発達レベル	INSの対人志向スタイル	
	他者変化志向	自己変化志向
0：衝動的	非言語的攻撃(なぐるetc.)	泣く，引きこもる，撤退する
1：一方向的	一方的命令	従う，屈服する，助けを待つ
2：互恵的	説得，自己優先	譲歩
3：協調的	協同，相互の欲求と両者の関係への関心	

る能力)，(c)方略の選択と実行(複数の方略の中でその場面に一番ふさわしい方略を選択し，実行する能力)，(d)結果の評価(そうした方略によって生じた結果を評価する能力)の4つを設定し(Fig. 1)，その発達的変化を記述している(Yeates & Selman, 1989)(Table 2)．INSの発達レベルと同様に，各社会的情報処理ステップの発達レベルも視点取得のレベルに基づいている．問題の定義では，例えば，ボールが1つしか存在しない場合に，レベル0では「相手が自分にボールをよこさない」というような，身体的(物理的)レベルのみから問題が定義される．レベル1では，自己あるいは他者の「自分はボールで遊びたいのに，相手がよこさない」とか「相手がボールで遊びたがっている」といったようなどちらか一方の欲求の面から問題が定義される．レベル2では，「自己も他者もどちらもボールで遊びたがっており，両者の欲求が対立している」という観点から問題が定義される．レベル3では，「2人ともボール

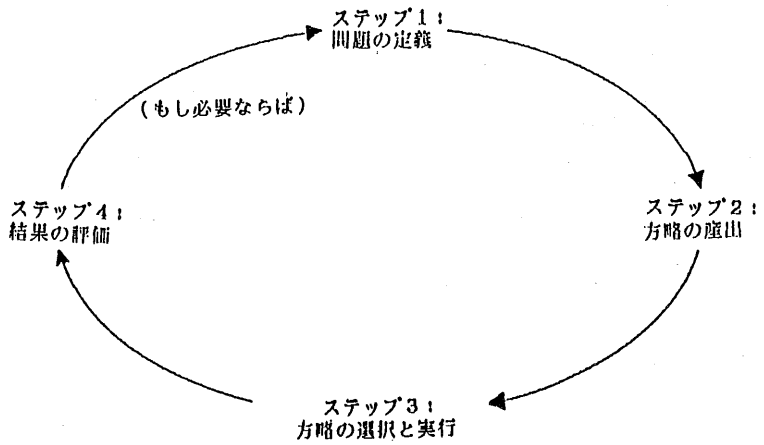

Fig. 1　INSモデルにおける機能的ステップのフィールドバック経路(Yeates & Selman, 1989)

Table 2 社会的情報処理ステップの発達的な変化(Yeates & Selman, 1989)

レベル	情報処理ステップ			
	問題の定義	方略の産出	方略の選択と実行	結果の評価
0	心的な面を考慮せず，身体的(物理的)面から問題が定義される．	方略は，衝動と行動がほとんど未分化な身体的(物理的)なものである．	自己を直接満足させたり，守ったりするための方略が選択される．	結果は，自己の直接的な欲求に基づいて，評価される．
1	自己，あるいは他者のどちらか一方の欲求の面から問題が定義される．	方略は，力の主張か，あるいは服従である．	短期間の間，自己，あるいは他者を喜ばせる方略が選択される．	結果は，自己，あるいは他者のどちらか一方の個人的満足の面から評価される．
2	自己と他者の欲求を同時に対比させることによって，問題が定義される．	方略は，平等な形で，両者を満足させるものである．	自己と他者及び二人の関係を満足させるような方略が選択される．	結果は，平等な交換を重視した，両者のバランスを基に評価される．
3	相互の目標と両者の長期間の関係の両面から問題が定義される．	方略は，自己と他者の目標を統合するものである．	両者の関係を持続させたり，協力を最大限にするような方略が選択される．	結果は，両者の関係に及ぼす長期間の効果を考慮して評価される．

で遊びたがっており，2人は友だちである．自分は今，ボールを独占したいが，2人の現在，及び今後の関係を考えるとそういうわけにはいかない」というように自己と他者の目標と両者の関係から問題が定義される．また，結果の評価に関しては，レベル0では，「自分はボールを手に入れることはできなかった」などという単純で身体的(物理的)面から結果が評価される．レベル1では，どちらか一方の個人的満足からのみ結果が評価され，レベル2では自己と他者の欲求を正当に評価し，交換や取引きといった公平性・平等性の観点から結果が評価される．レベル3では，「自分は2人の人間関係を考慮して，ボールを相手に譲ってあげた．2人の関係は今後もっとスムーズにいくだろう」といったように，結果は方略が両者の関係に及ぼす長期間の効果を考慮して評価される．

これまで述べてきたように，INSモデルはSPS介入モデルのための基準を満たしており，また対人交渉方略の成功は社会的適応と関連していることが示されている．こうした点から，彼らは，“INSモデルから，ある種の介入の法則を引出し，これらの法則を教育の専門家たちが直面している問題に適用し，その問題を解決することができる(Yeates & Selman, 1989)”と結論づけている．

要 約

本論文では，まず，過去のSPSスキルトレーニングが社会的適応と必ずしも関連しなかった原因について，研究者たちが行った批判的考察を紹介した．次に，それらの批判的考察を考慮し，Selmanらが定めた適切な介入モデルのための必要条件を述べると共に，それらの条件を満たすと考えられるINSモデルを紹介した．

付記

本論文は，筑波大学に提出された修士論文の一部を加筆・修正したものである．

参 考 文 献

Beardslee, W.R., Schultz, L.H., & Selman, R.L. 1987 Interpersonal negotiation strategies, adaptive functioning, and DSM-III diagnoses in adolescent offspring of parents with affective disorders: Implications for the development of mutuality in relationships. *Developmental Psychology*, **23**, 807-815.

Dodge, K.A. 1985 Facets of social interaction and the assessment of social competence in children. In B.H. Schneider, K.H. Rubin, & J.E. Ledingham (Eds.), *Children's peer relations: Issues in assessment and intervention*: Pp.3-22. New York: Springer-Verlag.

Dodge, K.A., McClaskey, C.L., & Feldmen E. 1985 Situational approach to the assesment of social competence in children. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **53**, 344-353.

Dodge, K.A., Pettit, G.S., McClaskey, C.L., & Brown, M.M. 1986 Social competence in children. *Monographs of Society for Research in Child Development,* serial No.213, **22**, 1-79.

Gesten, E.L., Apodaca, R.F., Rains, M., Weissberg, R.P., & Cowen, E.L. 1979 Promoting peer related social competence in schools. In M.W. Kent & J.E. Rolf (Eds.), *Primary prevention of psychopathology: Social competence in children.* Vol.**3**. Hanover, NH: University Press of New England.

Gottman, J.M. 1986 Merging social cognition and social behavior. *Monographs of Society for Research in Child Development*, serial NO.213, **51**, 81-85.

濱口佳和・新井邦二郎 1991 児童の社会的コンピテンスへの接近法についての考察－場面特殊的－内潜的過程アプローチの提唱－．筑波大学心理学研究，**13**, 185-202.

広岡秀一 1985 社会的状況の認知に関する多次元的研究．実験社会心理学研究，**25**, 17-25.

Putallaz, M. & Gottman, J.M. 1983 Social relation-ship problems in children: An approach to inter-vention. B.B. Lahey & A.E. Kazdin (Eds.), *Advance s in clinical child psychology*, vol.**6**, Pp.1-43.

Riggio, R.E. 1986 Assesment of Basic Social Skills. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 649-660.

Sarason, B.R. 1981 The dimensions of social competence: contributions from a variety of research areas. Wine, J.D. and Smye, M.D. (Eds.), *Social competence*. 100-122. Guilford Press: New York London.

Selman, R.L., Beardslee, W., Schultz, L.H., Krupa, M., & Podorefsky, D. 1986 Assessing adolescent interpersonal negotiation strategies: Toward the integration of structural and functional models. *Developmental Psychology*, **22**, 450-459.

Selman, R.L., & Demorest, A.P. 1984 Observing troubled children's interpersonal negotiation strategies: Implications of and for a developmental model. *Child Development*, **55**, 288-304.

Shantz, C.U. 1983 Social cognition. In P.H. Mussen (Ed.), *Handbook of child psychology: Cognitive development* (Vol.3, Pp.495-555). New York: Wiley.

SpivacK, G., Platt, J.J., & Shure, M.B. 1976 *The problem-solving approach to adjustment.* San Francisco: Jossey-Bass.

Urbain, E.S., & Kendall, P.C. 1980 Review of social-cognitive problem-solving interventions with children. *Psychological Bulletin*, **91**, 109-143.

Weissberg, R.P. 1985 Designing effective social problem-solving programs for the classroom. In B. Schneider, K.H. Rubin, & J. Ledingham (Eds.), *Children's peer relations: Issues in assessment and training* (Pp.225-242). New York: Springer-Verlag.

Yeates, K.O., Schultz, L.H., Selman, R.L. 1991 The development of interpersonal negotiation strategies in thought and action: A social-cognitive link to behavioral adjustment and social status. *Merrill-Palmer Quarterly*, **37**, 369-406.

Yeates, K.O., Selman, R.L. 1989 Social compentence in the school: Toward an integrative developmental model for intervention. *Developmental Review*, **9**, 64-100.

—1993. 9 .30受稿—